

<書評>

鯨岡 峻 編訳著 鯨岡和子 訳

「母と子のあいだ:初期コミュニケーションの発達」

ミネルヴァ書房 1989

大藪 泰
Yasushi Ohyabu

本書は、Lock, A.(ed.) “Action, Gesture, and Symbol” Academic Press, 1978とBullock, (ed.) “Before Speech” Cambridge University Press, 1979に含まれている36の論文の中から編訳者により選択された10の論文と編訳者自身の1論文によって構成されている。乳児期における母子相互作用に関する研究は、この20年間におよびたく登場してきた。そして、乳児期初期においても母子間でのコミュニケーションが、非常に巧妙に仕組みられていることが明らかにされたのである。それが可能になったのは、母子の交流場面を録画したビデオテープや映画フィルムを詳細に分析できるようになった技術力に負うところが大きい。本書に再録された論文の多くも、こうした映像のミクロな分析データに基づいている。以下に、各論文の要点とその特徴を指摘してみたい。

第1章は、Clark, R.A.の“The transition from action to gesture”である。この論文では、母子間での「物の移動」(手渡し行動)のミクロな分析から、原初的段階のコミュニケーションでは乳児にコミュニケーションの意図がないけれども、母親によってなされる乳児行動(意図)の解釈がその基盤にあることを見だしている。そして、母親によるそうした援助によって、乳児は自分の身体と環境との一つの間接的な関係を示されることになる。乳児の意図的なコミュニケーションの発生は、こうした母子の関係性から生じるとみなされるのである。

第2章は、Gray, H.の“Learning to take an object from the mother”である。この論文でも、乳児に物を持たせる関わりに見られた2組の母子

の微妙な違いを分析し、乳児の対象指示的なコミュニケーションの発達は、母親が自分の行動と乳児の行動に注意を向けることによって行なう解釈に依存する可能性を指摘している。

第3章、第4章は、いずれもTrevarthen, C.の論文である。第3章の“Communication and cooperation in early infancy: a description of primary intersubjectivity”でTrevarthenは、生後1～3カ月児の映像記録を詳細に分析することにより、「人類は人に対して人間らしく反応したり自らを表現したりするメカニズムを生まれつき持っている」と考えるようになったという。乳児が他者とコミュニケーションできるためには、先ず「個としての意識や意図の原型を他者に示すこと」ができなければならない。活動主体のこの属性をTrevarthenはsubjectivity(主体性:鯨岡訳)と呼んでいる。そしてさらに、「この主体的調整を他者の主体性に合わせること」が必要になるのである。この属性がTrevarthenのいうintersubjectivity(相互主体性:鯨岡訳)の概念である。このintersubjectivityを乳児が持つ生得的能力として、コミュニケーションの発達を考えていこうとするのがTrevarthenの立場である。第4章の“Secondary intersubjectivity: confidence, confiding and acts of meaning in the first year”では、生後6カ月以降に出現するコミュニケーションの新しい形態として、secondary intersubjectivity(第2次相互主体性:鯨岡訳)を指摘している。これは、「乳児が周囲の熟知した物理的現実への興味と、人に向けるコミュニケーション活動とを組織的に結びつける」現象を指した用語である。

母一子の2項関係から、母—もの—子という3項関係への発達が母親との相互作用の過程でどのように進行するか分析がなされているのである。第1章、第2章の論文と比較すると、Trevarthenはコミュニケーションの発達に果たす乳児の生得的な対人関係能力を強調しているといえよう。

第5章、第6章は、Newson, J.の“Dialogue and development”と“The growth of shared understandings between infant and caregiver”である。これらの論文でNewsonは、Trevarthenのintersubjectivityの概念を高く評価しながらも、「乳児の活動は他者の解釈という主観的フィルターをいったん通って処理される」側面を強調している。「子どもから引き出された『行動』が結局子どもにとって意味あるものになるのは、まさに母親がそれらに意味を負わせるからである。・・・活動が、意味ある行動の地位まで達するかどうかは、対人的やりとりの文脈内にある手掛かりを基にして、それらがコミュニケーション身振りとしてどこまで利用されるかにかかっている」からである。そして、こうした母親の解釈に基づく母と乳児の「対話」という文脈を共有する中から、乳児はコミュニケーションの前言語的コードを徐々に発達させていくのである。したがって鯨岡が指摘するように、Newsonのintersubjectivityに対する考え方には、Trevarthenとは異なり、むしろ「間主観性」という意味が色濃く反映されているように思われる。

第7章のKaye, K.による“Thickening thin data: the maternal role in developing communication and language”にも、間主観的な考え方が滲みでている。それは、母親と子どもの役割に見られる不均衡の指摘によく現われている。つまり、(1)反応のタイミングや子どものかなり規則的な循環反応を予期することに関する母親の優れた柔軟性、(2)一種の直観的カリキュラムに沿って、常に子どもを発達的に前進させようと引っ張るための、母親の手札の豊富さ、(3)子どもの表現の変化を素早く読み取ってコード化し、ギアを入れ替えて模倣するための機会を的確に掴む母親の能力、(4)特定の反応様式に相対的に固執する子どもに比べて、目的のために手段をあれこれ取り替える母親の柔軟性、(5)反復や二者ゲームの自分の役割に

変化を持ち込む母親の創造性、の5つである。

第8章は、Collis, G. M.の“Describing the structure of social interaction in infancy”、第9章は、Condon, W.S.の“Neonatal entrainment and enculturation”であり、いずれも鯨岡が指摘するように、母子コミュニケーションを行動科学的な客観主義に基づいてマイクロ分析した研究例である。行動科学的にコミュニケーションを分析するとき、母子の関係は、子どもの行動 → 母親の応答 → 子どもの応答、あるいは母親の行動 → 子どもの応答 → 母親の応答という、行動の連鎖としてとらえられる。

第10章は、Ferrier, L.の“Word, context and imitation”である。生後1年間の育児過程で、母子が相互にそれぞれの行動について一連の予期を形成し、そのような予期がその後のコミュニケーションの基盤になるとみなされている。そして、母親の話しかけの内容とその文脈とに注目しながら、子どもの発話過程を模倣理論によって解明しようとしている。

最終章は、編訳者である鯨岡峻の「初期母子関係における間主観性の領域」である。乳児期初期の母子のコミュニケーションをマイクロ分析して、行動科学的に母子間のやり取りを理解しようとするとき、母と乳児の相互の応答は自動的になされるもののように把握されやすい。そのとき、母親の応答の違いは、たんに母親の個人差であるとみなされることになる。しかし、それで果たして母子のコミュニケーションの内実が理解できたといえるのだろうか。この鯨岡の論文は、その点の問題を鋭く抉りだしてくる。「母親は赤ん坊の行動に直接応じているというより、子どもの行動や様子から感じ取ったことを基に応じている」のではないのだろうか。この「感じ取る」というフィルターを経過して、母親にも乳児にも対人的な応答が発生するのではないのだろうか。鯨岡の「間主観性」(inter-subjectivity)は、その問題に正面から迫ろうとする概念である。

以上のように、本書には乳児期における母子間のコミュニケーションを、行動科学的な客観主義に立脚して分析する立場から、相手から感じられるものに心を開き、相手の心を読み解くといった「臨床的」な立場にまでわたる論文が収められて

いる。その意味で、母子のコミュニケーションの
成り立ちを考えるうえで、貴重な材料と視点を提
供しているといえよう。

(1990. 9. 30 受理)